



marge

46 マルジュ

あなたのそばの
保険代理店
グット・ライフ

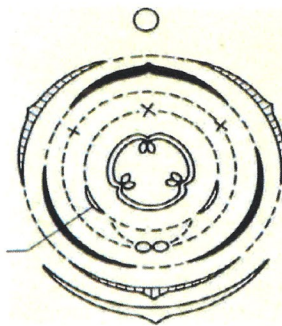


あなたのそばの保険屋さん

神奈川・平塚・立野町3995

八間通り沿い・済生会病院並び北八八歩

「山も田んぼも風景もみんな既製品になっ
てしまいました。味気ないですな」とは、
桜守と呼ばれる十六代藤右衛門の概
嘆。氏が守りする嵯峨野仁和寺宝生
桜が被災地の学校に移植された
と聞く。左は花の構造図、「花式
園」さて、何科でしょうか？



前号の答え「空海」

あなたの身近な問題を考えるのが、私たちグット・ライフ
の仕事です。ぴったりサイズの保険をおあつらえ致します。

グット・ライフ

goodlife@cosmos.ocn.ne.jp

Tel 0463-37-1955

Fax 0463-37-1966



We wish "May be your good Samaritan every night and day."

真珠を例にしよう。
宝飾の卸しをする親戚があり、十のころ、めずらしい体験を何
度かした。
ズラーと、6ミリパールのチャーカーが三〇本並ぶ。値札は裏返
しに隠してある。「どれが良い品か。一、三本選んでしらべ」当
たった。たぶん、誰もが美しさの序をまちがわないだろう。
結婚指輪用のダイヤも品比べした。コンマ4キヤラあたりの石。
ループでのぞけば、これも当たる。40という評準を知らなくても
見分けがつく。品質という稀少性が価格に直截相当てられていれば、
値の上下は分かるもんだ。凝目瞭然。素人、小学生も見誤らない。
りゆうはかんたん。いいモノは、どこか、いい(かのプラトンの、
同語反復っぽいイデア論によっかかるまでもない)。
選別のために数千個のパールが板に載せられ、プロのふるいに
かけられる。おなじアコヤ貝の6ミリ玉といっても、ちがう。工業
製品ではないから完全球ではない。おそらく百分の数ミリのいび
つさを選別眼は見逃がさない。無傷はまずなく、針で突いたよう
なキズはあるものだ。色、パールのみみ賦与されている美。その固
有の美しさといっても、黄味が勝てば、貧相にみえる。
玉を置く技術がある。人目につきやすい位置に良質を配する。
そこから離れるに従って、玉質は少しずつ落とされる。このよう
にしないと、商品として数が確保できない。そんな算段せずに作
られたチャーカーと見比べれば、差は歴然。
とびきりの巻(玉)をつなげば、とびきりができる。さらに、三
キモト、その冠名にふさわしい上品はこうして生まれる。

まちかど

得難い体験は教訓を暗に示す。ひとつ。ことばの内実をため
せ。「アコヤ」「6ミリ」など、文句に踊らされるな。つまり、
自分の目を信じる。見なければ、信じるな。つまり、目は
だまされない。自分の脳に欺かれるな(この先が、肝要かもし
れない。美しいモノはこわい、こわいモノにはちかづくな。饅
頭のこわさは胃袋の限度まで。美は脳が喰う。きりがない)。
柔らかなたなごころが女の手を包みこむように支える。男の
指の腹が指の贅までリングを滑りこませる。流麗な拳指。寶石
は妖しく輝く。そのおじさんが言っていた。らんらんと輝くの
が客の目というもんだ。アタッシュが開くと、漆黒のピロード
を伺させた石に、目がキラついてくるのだ。ひとつは美
に惑い、憑かれる。そうして、しばしば、頭からバリバリと、脳
みそから喰われてしまう。危うさ、それも美。
さいわいにも、石はこの頃私をさほど魅惑しない。イシばか
りでなく、ブツに魅かれない。美しいと感じるのは、たとえ
いい真珠に育てよと養殖者が海をはかる眼、石玉映えよと磨く
職人の匠。地味と称しても許されうる、いびし銀の行為を内か
ら支えているなにか。ブツの長息に比べ、またたくまに絶え
去っていくなにか。心をふるえは、肉に映らぬこと。
「美」などと言いだせば、もはやお笑い草の世情の気もする。
さて、いまだきホケンが電子情報、紙っぱら、書類は保険会
社の、さしもお義理ではあるまい。小社の名が彫られる證券は、
ゴールド・ペーパーでありたい。日々の鍊金を頼み、ブツチナた
れと努める。すずやかに暮らそうという人と共にあるために。

はるよ 来い!

伊勢田 洋次

◇ 今は亡き母は、明治42年8月生まれであるから、生存していれば104を数える歳である。「娘時代に東京に奉公に出されて礼儀作法を習い、家庭生活の基本や躰を身に付けた」とよく話していた。当時は「習い奉公」といって年頃の娘を名士宅に住み込ませてご奉公するしきたりがあり、その間小遣い程度の給金を頂いて働いたようである。

◇ この奉公、実は封建時代では、朝廷や君主が仕官した家来に「忠勤に励めよ」と訓を垂れ、禄を与えて、生涯ご奉公させたこと、まさに滅私奉公を意味した。又この時代、下層社会では、領主から貸与された農地を耕作し、その収穫物の大半を捧げ、残余で命をつないでいた農奴が多々存在していた。彼らは奉公ではなく隷属、すなわちどうにも身動きできない身分的拘束を受けていた。

◇ 似たような制度は古代ギリシャ・ローマや近代では南北アメリカの植民地にも存在した。奴隷制である。彼らは人間であって人間ではなく財産、家畜として売買され、ただ黙々と所有者のために働くことが強制された。しかし19世紀初めに奴隷解放の運動が盛んになりイギリスは1833年にアメリカは1865年の南北戦争の結果、奴隷制は廃止された。

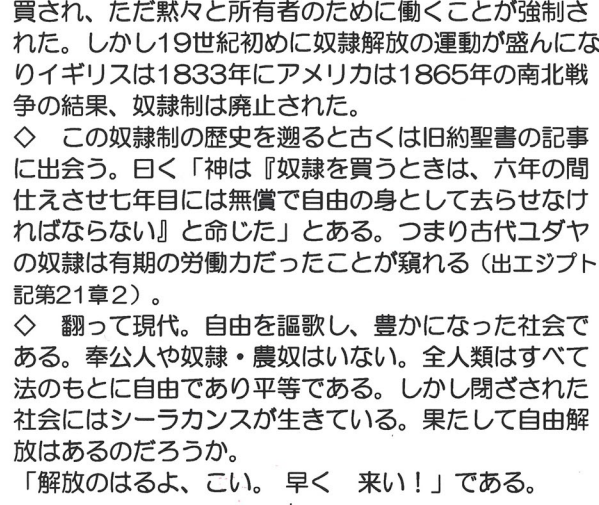
◇ この奴隷制の歴史を遡ると古くは旧約聖書の記事に出会う。曰く「神は『奴隷を買うときは、六年の間仕えさせ七年目には無償で自由の身として去らせなければならぬ』と命じた」とある。つまり古代ユダヤの奴隷は有期の労働力だったことが窺れる(出エジプト記第21章2)。

◇ 翻って現代。自由を謳歌し、豊かになった社会である。奉公人や奴隷・農奴はいない。全人類はすべて法のもとに自由であり平等である。しかし閉ざされた社会にはシーラカンスが生きている。果たして自由解放はあるのだろうか。

「解放のはるよ、こい。早く 来い!」である。

★昨年10月改定につき、本年4月より自動車保険は、ロード・サービス等を変更。くわしくは訪問の折、お尋ねくださいませ。
謹啓、平素は格別のご高配を賜り、ありがとうございます。本年も、自動車保険のご契約者みなさまの一年間の無事故を御祈りいたします。祈念の気持ちを込めて、素品を用意いたしております。ご契約の継続手続きの際にお届けいたします。小社からの花一輪をお受けといただければ、幸いです。店主 敬白

【お届けの押し花の葉は、山見共園作業所ひばり乃ショップ作成。手作製品多数量取揃。各種製作応需。平塚市御殿1-17-1 ☎0463(31)0723】



「行くことによって、どこに行くべきか、ぼくはまぼろし」

"I learn by going where I have to go."
Theodore Roethke
セオドア ロートキ

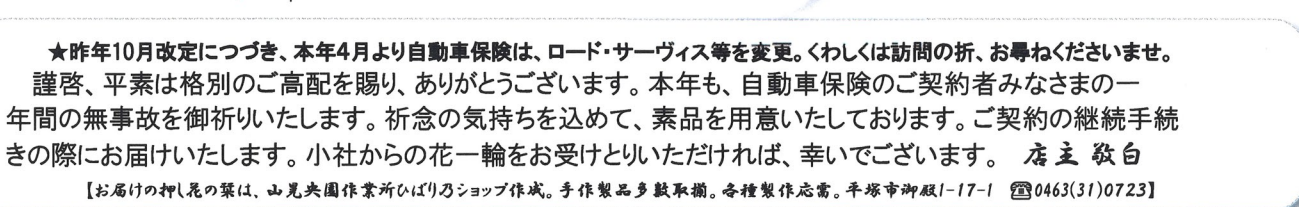
〔若い隣人への手紙〕

元気ですか? 環境が変わると、なにかと大変でしょう?

適度に心身をいたわりましょう。暦はよくできていて、新年度四月の喧噪を押しずめるように、大型連休があります。その後もだいたい二カ月置きにちょっとした休みがあります。カレンダー通りに休めるのかな? でなくても、機をとらえて、新たな人間関係に慣れるためのエネルギーを補ったり、ぼつぼつと仕切り直しを心してきては? ぼくは、そうやって、どうにか回りからのストレスをやり過ごしてきます(あなたの年頃、丸一年胃が肉魚を受け付けず、はからずもベジタリアンになる寸前までいっちゃんいましたけど)。

もうひとつのアドヴァイスは、視点です。目は、地上150、60センチばかりにつける。ヒールを履いたところで、私たちは地を這ってるようなもん。立ち位置とでも言うのでしょうか、その場がちりと据えられと、からだの制約がところを拘束していきます。たまには、思い切って、鳥になってみませんか。ほら、航空写真というのがありますよね。あんな感じ。鳥瞰の像をえると、私は、自分を「地虫」くらいに思いたすことができました。そうすると、ゴリゴリだかプリプリだか、いずれにしても、ゴミゴミていどのボクが、そうまささらに悩んだりするのは、滑稽である気がしました。そんなみすぼらしい自分は受け入れがたかった。日常の重力から、すこし離脱して、俯瞰ふかんを試みる。ずいぶん楽になりますよ。

空間、のつぎは、時。「時を超える」ことですね。もっとも手易いのは、本です。うんと昔のものがいい。古典を読む。ここ十年や百年あたりの本だと、時間尺を錯覚し、書かれた状況を読み誤るのでお勧めしません。『ブッダのことば』とか新約聖書の「マルコによる福音書」とか、がいい。当の御方は、まさか、言行録ができるとは思ってもよらなかったはず。なぜだか、しゃべったことばが、ひとの心に残り、綿々と伝えられた。「なぜなのか」の一端に、あなたが関心をもつようなら、私はうれしいのですが。



アリストテレスの『ニコマコス倫理学』なんかも、いい。いかめしい書名ですが、『ニコマコスが書きとった「善く生きるとは?」』ということです。平明な訳です。どれも廉価な文庫で手に入ります。青陽の初読より、いまま私の枕頭にあります。

まず、ひとりであることができるようになることです。この、日本社会では、ひとりであることの社会評価がいちじるしく低い。三十年前もいまも大差なし。ひとりであるのは、現在のほうがむづかしいでしょう。なんせ iPhoneとか、スマホあるから。

ふしぎと思いだしたのが、リチャード・ブローティガン。『西瓜糖の日々』(1970、河出文庫。「空気のうすさ」感なら、村上春樹の文学的兄の一面をもつ作)があります。物語にでてくる、外部を持ちながらも閉ざされた世界。その名が「アイデス」 iDEATH。小文字の「わたし」 i が主文字の「死」 DEATH にくっつき、一語。「あなたの心に浮かぶこと、それが私の名前なのだ」という「私」の希薄さ。死に私が、へばりつく。個の死の忌避がもたらした、情動の逸滅、そのイメージが濃厚。

20年まえ、アップル社が iMacを出したときは、連想がはたらかなかったのですが、スティーヴ・ジョブズは、当時から自社製品に iDEATHの皮肉をこめたのかも、と勘繰ってます(西海岸の、慣用な表記法ならば、安堵するのですが)。「使い方は個々の勝手、で、i・・・でなにやってるのかね」とジョブズの高笑いか、苦笑いか、ごだまします。

劃期のウェブ2.0以降、「検索」に「コピー」に「貼り付け」と目はあわただしくも虚ろ、頭は白描の如し。効率をもとめムダを厭うのに、情報の取捨には選択眼の涵養が要ることには、労は惜しむ。ネットの衆合知(collective intelligence)をもって解けない、「個」有の難路に行きあたったら?、そのとき、どうしましょうか。

なまなか眠りの訪れない夜な夜な、おぼろにも先哲の声を聞きながら、自己内対話を繰り返す。これよりほかに生の「独異」に対峙する妙をすでに私たちが得ている、とは考えません。

「ここで生きているとすれば、もうよく慣れていることだ。またよそへ行くとなれば、それは君のお望み通りだ。また死ぬとなれば、君の使命を終えたわけだ。以上のほかに何物もない。だから勇気を出せ」 こう生き[き]で語られたら反発したでしょうが、回りには、こう雄渾に話してくれる人は見当たりませんでした。自分の環界がごちなく、ちぐはぐ、そんな困憊の一日の終わりにマルクス・アウレーリウス(『自省録』)。私の知己のひとりです。

話を唐突に転じます。昨夕三國連太郎の訃報に接しました。俳優、享年九〇。私が出版社にいたとき、打合に陋屋を訪問され、茶をお出した覚えがあります。おもむろですが、次は、三國さんの個にふれ、書き継ぐことにします。「今頃なんだね」と泉下の「個」人は眼を丸くされるでしょうが……、では、また。

秀さん、祝免許取得。保険「使い方」講座受了、お疲れさま。ナビへの脇見は程々に。彼女とのドライブは急がず焦らず、よそ見は禁物